

エ ッ セ イ



「聖観音立像」 鈴木 幸一

牧野富太郎先生が成東高校に來た時のこと

（高校生だった父の思い出ばなし）

佐倉市（市内在勤） 大石 由香

牧野富太郎先生は、成東にもゆかりのある高名な植物学者です。特に、令和五年にNHKの連続テレビ小説「らんまん」の主人公として取り上げられてから、知名度が一気に上がったように思います。牧野先生は、成東・東金食虫植物群落にも度々訪れており、山武市歴史民俗資料館で企画展も開催されました。

私の父は秋葉昌信といい、昭和七年生まれです。父が四十代半ば、私が小学校四、五年生頃だったと思います。ある日、父が『牧野新日本植物図鑑』を買って帰ってきました。とても厚い本で、当時の値段で一万三千円しました。ずいぶん高い本だなと思ったものでした。そして、父は「これを書いた先生と会ったことがある」と誇らし気に話しました。牧野先生は、父が生徒だった頃に成東高校を訪れたそうです。

この話は令和五年の夏に父が書き始めたものの、鉛筆を持つのが大変そうだったので途中から私が聞き取り、文字にしたものです。

今は昔のことなので、記憶違いがあるかもしれませんが、成東高校に植物学の大家の牧野先生が植物採集においでになった時のことを書きます。私が高校二年生の時のことです。「好きな人は植物採集に参加してほしい」と校内放送が流れました。生徒の参加者は二、三十人で、牧野先生は二人のお弟子さんとご一緒でした。そして生徒たちの植物採集が始まりました。

面白半分で参加した生徒のこと、何が始まるかわかりません。ある生徒が、自分がかくれるほどの「ホウキグサ」を持つてきました。それに対して先生は、「そんなにたくさんはいらない。自分の手に収まるだけでよい。そうでないと山が荒れてしまう」と言いました。

また、ある生徒は、青いきのこを牧野先生に見せました。すると先生は、「これはめずらしい色をしている。これは何々のきのこ（きのこの名前は失念してしまいました）の皮を剥いで青いインクを塗ってあるね」と言いました。いたずらを仕掛けた生徒も、その場にいた私たちも、大変な先生だとびっくりしたものです。

こんなやりとりもありました。生徒が「てんぐだけは毒が強いそうだから、先生ひとつ舐めて試してください」というと、「それはできません。いくら何でも、てんぐはごめんだ」と言いました。

牧野先生の話。ある時、先生はきれいな蝶を見つけ、どこまでも、追っていったことがありました。二日二晩付いて行ったが、三日目、ついに見失ってしまいました。そして、しかたなくひき返したことがありました。服はボロボロ、ひげはぼさぼさであったが、先生はそんなことは全然気にしなかったそうです。

その後、牧野先生は銚子へ植物採集に行くということで、成東駅に三十人程の有志で見送りに行きました。当時、駅には桜の木があり、先生はその木に登り始めました。何か気になる苔があったのだそうです。発車の時刻が迫っても木から降りない先生は、二人のお弟子さんに引きずり降ろされ、銚子行きの電車に乗りました。

父は松尾町折戸の生まれです。結婚後は成東町木戸で生活をしていましたが、令和六年二月に九十一歳で他界しました。植物が好きで、庭にはよく花や木を植え、畑では野菜や果樹を育てていました。先生との出会いは、父が植物好きになった一因かもしれないと思います。

前述しましたが牧野先生が成東高校に来て、父が植物採集に参加した話は、子どもの頃から何回も聞きました。内容も毎回同じでしたので、そのようなことがあったのだと思います。蝶を追いかける話は初めてでしたが、成

東駅で見送った話も数回聞いたと記憶しています。

父は生前、敬意をもって「牧野先生」と言っていましたので、私もこの文の中では「牧野先生」と綴ることにしました。そして、父の『牧野新日本植物図鑑』は、今は農学部に進んだ私の息子が譲り受けました。本棚の中で一冊だけ古い植物図鑑を眺めると、祖父から孫へ何か伝わったものがあったのだなと感慨深い気持ちになります。

最後になりますが、冒頭で書きましたとおり、九十歳の父が語った「今は昔のこと」として、読んでいただければ幸いです。

おばあちゃんの樹

殿台 渡辺なるみ

二〇二四年初夏、今年は梅が全国的に不作の年でした。私の実家の梅の木もいつもの年の半分以上しか実がなかったようです。

そんな実家の梅の木は、今年新盆を迎えたおばあちゃんが植えた梅の木です。一体、何十年経つのでしょうか。私が小さい頃から毎年毎年、梅の実がなる時期になれば梅を拾い、塩漬けし、土用干しをして漬物樽に年ごとに保存していました。いわゆる田舎のとてもとてもすっぱい梅干しです。家族だけでは食べきれず、今でも年代物の梅干しが実家にはあり、結婚し家を出た私も梅干しは買わず、頂くものと思つて実家からもらっていました。

おばあちゃんは大正十一年生まれ一〇二歳で、昨年天寿を全うしました。嫁に來た母親はすでに七十六歳です。梅づくりを引き継ぐには身体がつらく、何年か前から私も手伝うようになりました。いろいろと手伝うことにより、生まれてからずっと実家では普通だったことが、今の世間一般の家庭では普通ではないのかと気がつきました。

実家はいわゆる分家の新宅農家で、おばあちゃんの世

代が家を建てました。父が産まれてから建てたと思うので、戦後に建てたのだと思われます。戦後に建てた農家の家、庭には果実のなる樹が何種類も植えてあり、季節ごとに花を咲かせ、実をならせ、家族で食べるため用に収穫していました。

柚子の木、梅の木、きんかんの木、柿の木、びわの木、みかんの木がそれぞれ一〜二本ずつ庭の周りを囲むように植えてあります。それぞれ世話をしているわけではなかったもので、お店で買うものよりは甘くないですが、毎年毎年実をつけていたので、

「今年もまたそんな季節なのだな」

と思いつながら実家で暮らしていた頃は食べていました。

ガソリン代から電気代から食材から何から何まであらゆるものが値上がりの物価高の今の時代、なんて幸せなことでしょう。物のない戦後の時代から昭和、平成、令和と世の中が移り変わる中、実家の庭は何も変わらずに何十年も月日を過ごしてきました。そして、これからもしばらく続いていくのかと思うと、

「おばあちゃんはすごいな。本当にありがとう」

と、亡くなった今になり思います。

スーパーに行き代金を支払えば、季節を問わず野菜、くだもの、魚などほとんどの品物が手に入ります。喜ん

で買いに行っていたのは、今は昔、景気のよい時代の話で、今はいかに楽をして収入を得て、いかにお金を使わないで生活できるか遊べるか、コスパがよいとかタイパがよいとか、ネットもニュースもそんな情報ばかりであふれているように思います。

梅干しが食べたいと思えば、産地からのお取り寄せから地元の道の駅、スーパーなど選びたい放題です。南高梅、はちみつ梅、減塩梅。お金を払えば、とてもおいしい梅干しが食べられます。

ただ……実家の場合は、自分たちで梅干しが作れるのです。梅の実を買わなくとも、庭の梅の木には実がなり、ぼろぼろと地面に落ちてくるのです。梅の実があれば、梅干しだけではなく、梅酢も同時に作れますし、梅シロップも作れます。梅酢があれば、漬物が作れます。梅シロップがあれば、炭酸で割って梅ジュース、お酒の梅サワーも作れます。

手間を惜しまなければ、手作りでいろいろ作れたこと、おばあちゃんにもっと聞いておけばよかったと思います。柚子があるから柚子茶も作れるな。びわの木があるから、びわの葉茶も作れるな。

若い頃は作る時間をもったいなく、おいしそうなものや目新しいもの、おしゃれなもの、流行っているものが

食べてみたくて、世の中のマーケティング商法にうまくのせられていましたが、これからの時代は自分がよいと思う方法で、手作りでもエコでも節約でもなんでもよいのだなと思います。

「いいね！」と言うのは、他の誰かではなく、自分です。そんなシンプルなことによりやく気がついたのは、おばあちゃんの樹のおかげです。

実家の庭にアボカドの種を植えてみました。何年後かに、アボカドの実がなるのでしょうか？

丹波篠山の『村上さん』

成東 高浦なみ子

NHKのBSプレミアムで放送中の『つぼん縦断こころ旅』という番組がある。

この番組は、俳優の火野正平さんが視聴者からの手紙に誘われて自転車で旅立ち、手紙に記された思い出の地や心の風景を訪ねるという旅番組である。平成二三年四月から始まり、春と秋の年二回それぞれ四、五か月かけて全国各地を駆け巡っている。

この一三年余り、ひたすらペダルを漕ぐ正平さんの後ろ姿を画面の向こうに追いながら、私も幾度となく一緒に心弾む旅をしてきた。

令和五年、苦しかったコロナ禍も、ようやく沈静化の兆しが見えてきた春の旅は、沖縄から始まり宮崎県、大分県と巡って、通算一七五日目の旅の目的地は、兵庫県丹波篠山市の黒岡集落に鎮座する『村上さん』という祠はこらだった。

寄せられた手紙には、もう六十年以上前、心臓発作で倒れた母の回復を祈って、当時小学生だった姉妹が毎日欠かさず『村上さん』へのお参りを続け、次に発作を起こしたら助からないと宣告されていた母が、姉妹二人の

結婚が決まるまで頑張って生きてくれた、という内容が綴られてあった。

番組の中では『村上さん』とは、越後（新潟県）村上九万石の藩主、村上忠勝のことであり、大坂夏の陣の三年後に丹波篠山に流罪となり、この地で没した人だと簡単に説明があった。

黒岡集落の広々とした田んぼに囲まれた一角に、手入れの行き届いているらしい小さな祠と『村上周防守供養塔』と刻まれた石碑がひっそりと建つ映像が流された。この静かな集落の風景と共に、幼い姉妹の母を思ういじらしさが胸に迫った。

姉妹が一心に祈った『村上さん』―村上忠勝―とは一体どんな人物だったのだろうか。罪を得て流人となりながら、その祠は四百年後の今も流刑地の人々に大切に護られている。これはどういうことなのだろうか。

『村上さん』の生涯や人となりが無性に知りたくなった。知りたいことはまずネットで、というのが最近の習慣になりつつある。実際、村上忠勝に関しても、半日ほどで三〇枚近くの資料をプリントアウトすることができた。だが、もともとアナログ派で、しかも疑り深い性格の私は、結局、図書館へ通い、古書店にも出掛けているうちに、春の旅が終わり、夏も過ぎて、あっという間に季

節が移った。

さて、村上忠勝のことである。

村上藩の初代藩主は村上頼勝といい、当初は織田方の丹羽家に仕え、次いで豊臣方の堀家の与力大名となり、慶長三年（一五九八）、越後本庄城で九万石を与えられた。この時、本庄の地名を村上に改めたと伝わる。藩境を接する上杉への備えのため、村上城の大改修を行ない、出羽街道の整備や、新たな町割を行なって現在の村上市の基盤を造った。

また領内の高根金山の開発を進め、慶長年間には全国の産金量の三分の一を高根金山で産出していたといわれる。頼勝には実子がなかったため、妹の子である忠勝を養子に迎えたという。

慶長二〇年（一六一五）大坂夏の陣が起ると、忠勝は越後高田六〇万石藩主、松平忠輝（徳川家康の六男）に従って大坂に出陣した。この時一七歳、おそらく初陣だったと思われる。

頼勝は、慶長一五年、或いは元和元年に死去したといわれるが、諸説あって判然としない。おそらく大坂の陣の頃には忠勝が家督を継ぎ、村上藩二代藩主となったのではないか。

忠勝はよく養父の事績を受け継ぎ、殖産を奨励し、高根金山の増産にも尽力したという。

しかし、元和二年（一六一六）、松平忠輝が改易（領地没収）処分を受け、伊勢へ配流されるに及んで、忠輝の与力大名であった村上藩も大揺れとなった。忠勝の正室は、松平忠輝の家老、花井氏の娘であり、より近い関係でもあった。

やがて、村上藩の藩政を監視するため幕府から監視役の家老が送り込まれてきた。

藩の重職である家老が幕府方、村上方の二派に分かれて争うことが多くなり、まだ年若い藩主の忠勝にはさぞ頭の痛いことであつたろう。本来ならば、忠勝を助けて藩政を正しく行なっていくべき家老たちが、私怨に駆られたかのように争い、ついに暗殺事件まで引き起こす。

元和四年（一六一八）忠勝は、家中騒動収められずとして改易処分となり、身柄は丹波篠山藩松平家へお預けとなった。

この時期、豊臣系の外様大名がさほどの理由もなく改易されることが多かった。松平忠輝との関係も不運であつたといえる。が、何より幕府に目を付けられたのは、村上領内の高根金山であつたろう。当時、産金量日本一の黄金の山である。

こうして、不運な若殿、村上忠勝は、捨扶持三百石を与えられ、篠山へ配流の身となった。家臣二〇数名が従ってきたという。

住まいは篠山城の一郭に与えられたが、外出は比較的自由で、家臣と共に村人に読み書きを教えたり、畑を耕したりしていたと伝わる。

このように、篠山では穏やかな日々であったと思われるが、それもわずか五年、元和九年（一六二三）、二四歳で没した。

篠山へ流された当初は、さぞ無念の思いが強かったであろうと察せられるが、自暴自棄になることもなく、家臣らの勧めもあつたろうが、畑仕事や村人との触れ合いの中で、心の平安を得ていったのだろう。

残された家臣たちは、地域の人々の助けを受けて暮らしを立て、主君の墓所を守りながら土着していったのではないだろうか。

それがいつの間にか「村上さん」と呼ばれ人々の心の拠り所として今もそこにある――

『にっぽん縦断こころ旅』の火野正平さんは、お手紙に誘われて自転車旅に出る。

私は、その『こころ旅』に触発されて妄想の歴史旅を

一年近くも楽しむことができた。
感謝頻りである。

参考文献

『越後村上氏二代』

歴研 志村平治

『藩史大事典』

雄山閣出版(株)

『江戸大名廃絶物語』

新人物往来社

変人の世界は楽し

五反田 竹内 克隆

令和六年元日、八十歳で迎えた正月は賑やかだった。

私の妹二人の家族が十二人、我が家が五人、総勢十七人の大盛況である。仏間に掛けてある両親の遺影も「みんなよく来てくれたな」思わず語りかけているようだ。コロナ禍の長い不在からようやく解き放たれて、老いも若きも飲食と歓談が途切れなかった。来年もまたつづけたものである。

楽しい時の経過は早い。宴の後には一抹の寂しさが残る。しかし、その寂しさはたちどころに消えて、日常に戻れる安堵感のようなものは、慣れ親しんで定着した、誰にも譲れない幸福の在処ありかでもある。

酔い醒ましにコーヒを啜りながら、去年までの大学ノートに替わり、真新しい三年日記帳に、今日一日を簡記した。さらに「一年の計は元旦にあり」日記帳の計画欄に、今年の目標を並べてみた。その中の一つに經典の読誦どくじゆと暗唱とを入れた。

なぜお経なのか？それは去年の暮れの勤行しんぎやうの際にふと思ひ起こした、遠い昔に聞いた菩提寺の住職の読経であった。確か「・・・観音力かんのんりき」と何回も出てきた。

「一体これは何経なのか？」そこで亡母が愛用した褐色に変色した古い經典「天台宗勤行儀」を開くとそこにあった。さらに調べを進めるとこの經典の本来の宗派は臨済宗で、その一部である「念彼観音經ねんびかんのんきやう」は、他の宗派でも広く読まれていることが分かった。

概要は『全てに慈悲を示す観音菩薩は、三十三の異なる姿になって人々の周辺に存在し、様々な苦境に陥った時に一心に「観音力」と念ずれば、観音様が現れてそのお力を持って、即座に苦境から救ってくださる』というありがたいお経である。

だが、現実にはそんなことが起こるはずはない。それは人々の心に、努力すること、挫折しないこと、信じることの大切さと尊さを諭し、人間に備わった諸々の能力の發揮により、苦境の解決を促した教えということであろう。

さっそく、「念彼観音經」の読誦に取りかかった。あくまでも暗唱することが最終目標である。先ず、「天台宗勤行儀」からその部分を別紙に書き写しルビも入れた。暗唱することは脳の活性化により惚け防止も兼ねると勝手に信じている節もある。こんな所業の人間は仏界に携わる人々を除いたら極めて稀有な存在だろう。知った人はきつと変人、好事家こうずかと思うに違いない。だが、そんな

ことはどうでもいい。私だけの秘匿の世界なのだから。

「世尊妙相具 我今重問彼・・・」で始まる経文は全五百九十八文字、その中に「念彼観音力」が十三回も出てくる。かなり難読、脅威に感じるが、難しくしているのは脳の劣化が原因といったほうが正しいだろう。とにかく、何日かかろうと成し遂げなければならぬ。脅迫されているように毎日取り組んだ。

経文の意味がものすごい。神秘的・幻想的な世界を描いたようで、例えばこんなふうだ。

「念彼観音力 火坑變成池 或漂流巨海 龍魚諸鬼難
念彼観音力 波浪不能没」

（燃えさかる火の穴に落とされても、観音様のお力を念ずれば、火の穴は池に変わる）

（大海を漂流して龍・鬼に襲われても観音様のお力を念ずれば、波に溺れることはない）

「或在須弥峰 为人所推堕 念彼観音力 如日虚空住
或被恶人逐 堕落金刚山」

（悪人に山頂から落とされても観音様のお力を念ずれば、太陽のように空中に留まる）

（悪人に追われて山から落ちても観音様のお力を念ずれば、傷一つ負わない）

と、こんな内容でまさしくファンタジー、魅せられてしまった。

しかし、難しい。なかなか覚えられない。でも、やらねばならぬ。変人の意地にかけてもやらねばならぬ。食事の時、入浴の時、草取りの時、犬の散歩の時、布団の中でも「念彼観音力・・・」脳裏にこびりついて離れない。自己嫌悪に陥りそうでも変人はしつこい、諦めない。その結果、牛歩のごとくメモリーの蓄積を覚えた。手ごたえを感じてきた。

そんな日々が経過した三月の初めに事件が起きた。忘れかけていた持病が復活したように襲いかかった。「痛風」である。病歴は二十年、この間に発症の間隔も疼痛の程度もさまざまに私の体に訪れたが、今回は実に五年のごぶさただだった。筆舌に尽し難い痛みは経験者にしか分からないだろう。

家内に助けられて病院へ、車椅子が頼りである。痛み止めの服薬で症状は急速に改善し、検査結果は意外にも正常値であった。怪訝をこめて医師に問うが、「値はあくまで安心の目安で、発症を保証するものではない」と、腑に落ちない得心であった。

時を同じくして信じ難いことが起きた。何と愛犬が動

けなくなったのである。私の発症の前日まで是一緒に散歩していたのに、よろよろして立ち上がれない。食べ物もまったく食べなくなった。寝そべって虚ろな眼差しで私を見ている。

「シユータ（犬の名）どうした。何があった？」ただ、ボーンとして辺りを眺めている。

「これはいいよ寿命かな？十四歳は人間で言えば後期高齢者、俺と一緒にだ」

「年だし仕方ないよね。可愛がったからいいじゃない」家内もすっかり諦めムードだ。

その時、私は咄嗟に思いついた。特訓中の「念彼観音力」があるではないか。犬の世界に通用するはずなどないのに私は必死だった。

「シユータ、立ち上がれ。食べる。このままでは死んでしまうぞ。念彼観音力」

結果はダメ、水を飲むだけだ。それでもつづけた。

「食べる、食べる、念彼観音力」

そうして三日目、牛乳をかけたパンをあげたら寝そべりながら食べた。四日目、おかゆにしたらまた食べた。ついに五日目、よろよろと立ち上がってワンと一声発した。「助かった。よかった」私は思わず抱きしめた。「そうかお前も私の病気に付きあってくれたのか」一層、愛

おしくなった。

十日後、ほぼ元に戻った人間と犬が笑顔を交わした。

復活した散歩はお互いに力感がいまひとつだが、いつもの距離は問題なかった。散歩しながら経文を「ぶつぶつ」と口に出すと、犬が不思議そうに私の顔を見ていた。その後も四六時中「念彼観音力・・・」我が脳内は経文が占拠している。飽くなき私の凝り性と集中力に終わりは無い。これぞ変人の真骨頂、誰も知らない私の世界だ。

特訓を始めて四か月、ついに目標達成の日が到来、時節は「昭和の日」になっていた。

「やった！ついにやったぞ」快哉を叫ぶ私の傍らを「・・・」まったく飽きずによくやるね」冷笑を浮かべて家内が素通りした。

記念に仏壇の鈴りんを買い替えた。新たに暗唱した念彼観音経を加えた約二千文字、二十分の勤行で今日も一日が始まる。定着した儀式のようで鈴の音色も心地よい。

愛犬も元気で安心しており、散歩も雨天以外は毎日だ。さすがに散歩中のお経はなくなった。今は自家薬籠中の物、朝に使うだけである。

同じような年齢の人間と犬の絆はますます堅固になった。「人馬一体」と言うが、我々は「人犬一体」お前は家族そのものだ。

西日を背に老人と老犬の影が歩道に長く伸びている。

「これからも頼むよ、バディ（相棒）」祈りをこめて犬に言った。

ヒオウギと出会う

姫島 鵜澤美知子

近隣に住むTさんのお宅へ、はこのYちゃんと伺ったのは、二年前（二〇二二年）の五月の末だった。

庭で育つ、五十cmほどのヒオウギ（檜扇）の株を、一株ずついただいた。きた。

その株の一輪目が咲いたのは、三か月後の八月下旬。六片のオレンジ色の花びらに暗赤色の斑点が入り、直径は五〜六cmほど。午前中に咲き、夕方にはしぼむ一日花である。

私はこの花を見るのは初めてだった。その可憐さに感激し、都内に住むライン友達のU子さんに見てもらうことにした。すると、すぐに返信が。

「『うずらちゃんのかくれんぼ』（福音館書店発行）の絵本に出てくるお花ですよ。この絵本は、大学一年生の孫娘が、子供のころ大好きな一冊でした。今でも、我が家の本棚にあります」

と、絵本の表紙の写真を添えてくれた。

私もかつて読んだことがあった。都内で暮らす小学生の孫息子たちがまだ幼いころ、よく読み聞かせたときのことを思い出した。

何ページにもわたり描かれているオレンジ色の花は、架空の花だと思いこんでいたので、ヒオウギだったことに驚いた。U子さんに、この花がヒオウギであることを知っていたのか聞くと、

「実在する花だとは思っていなかったもので、鵜澤さんからの写真で気づきました」

とのことだった。

小学二年生の充^{みづき}希に、ヒオウギの花の写真とメールを送る。「『うずらちゃんのかくれんぼ』の絵本に登場するお花が、きょう咲きました！」すると、「今、その絵本を見ているよ。きれいなお花だね」と、喜んでくれた。うずらちゃんとひよこちゃんが、自分たちの体の模様や色と形を上手に使い、花やヒヨウタンに隠れ、オレンジ色の花々の間で、かくれんぼをするようすが描かれている。

Yちゃんに、この絵本のことを話すと、

「以前、あなたにプレゼントしてもらったその絵本、今も我が家にあります」

とのこと。数年前に、娘さんの出産祝いにプレゼントしたことを思い出した。

この絵本は、「愛子さまご愛読の絵本」として話題になったこともあり、Yちゃんにぜひ、読んで欲しいと思った一冊だった。

「いずれは娘にも勧め、孫にも読ませたい」と、喜んで受け取ってくれた。

二〇〇四年七月、天皇陛下が撮影された、愛子さまの微笑ましい姿を映したホームビデオが、当時のテレビニュースで取り上げられた。その中で、愛子さまがこの絵本を、愛らしい声と表情で、ページをめくっていた。

懐かしく思い「うずらちゃんのかくれんぼ 愛子さま」を検索すると、動画があった。

ヒオウギについて、改めて調べてみた

・花言葉は「誠意」「個性美」「誠実」。

・アヤメ科アヤメ属の多年草で、夏咲き宿根草。厚みのある剣状の葉が何枚も重なり合い、扇を広げたように見えることから、この名前で呼ばれる。雄しべは三本、雌しべは一本で横に飛び出る。花は黄色やピンクもある。

・咲き終えた花は、花弁は、雑巾をしぼったような強くねじれた姿となり、そのまま果実の先に残っている。ねじれながら萎れる。

・花の後に袋状の大きな緑色のさやができ、熟すと割れて、中から五㎜ぐらいの黒いタネが出てくる。

・さやは、花が終わった後の実物。主に生け花に使わ

れる伝統花材。さやの中の黒い実は「ぬばたま(射干玉)」と呼ばれる。

・万葉の時代の人々は、ヒオウギの実を見て、暗闇や黒髪といったものを形容しようと思っていたようだ。

自らの感情や身近な現象を、近くの植物を用いて表現をしていた、万葉の時代の人々。

万葉集の中に、次のような歌の紹介もある。

ぬばたまの夜渡る月のさやけくは

よく見てましを君が姿を

(暗い夜に渡る月が明るく輝いていたら、あの人の姿をよく見ることができたのに)

※「まちの植物はともだち『ぬばたま』と呼ばれるヒ

オウギの実」より

これらの資料を読んだ後、我が家で咲いた花のその後を、観察することにした。さやは、一つだけついた。

ぬばたまと呼ばれる実は、いつになったら見られるのだろうか？ 待ち続け、十一月十四日、ついに、さやからツヤツヤの黒いタネが六粒はじけ出た。このタネは、いずれ孫たちが帰省したら、蒔いてもらうことにした。

タネを蒔く時期は三月から四月。開花までは二〜三年はかかるという。暑さにも寒さにも強いが、良い花を咲

かせるには、日当たりの良い場所が良い。そして、前年の秋までに、しっかりとした株にすることが大切だという。一株のヒオウギが開花してくれたおかげで、心の弾む、予想外の展開となった。

孫たちに六粒のタネを蒔いてもらったのは、昨年（二〇二三年）の四月二十三日。充希は三年生、弟の洸希（こうき）は一年生の時である。

発芽したのは五月二十七日ごろ。発芽した三株は順調に育ち、六月の下旬には10cmほどに生長。そして、扇の形をした株は五株に増えた。鉢植えにし、軒先で育てる。

開花したのは、今年七月二十七日の朝。タネを蒔いてから、約十五か月の経過である。孫たちは四年生と二年生になった。

二人に開花の報告をすると、まず、日数のかかったことに驚き、「そんなにかかるんだね！」と信じられないようすだった。夏休みに行ったら、ぜひ本物を見たいという。

開花はほぼ毎日で、一輪か二輪ずつ、たまには三輪咲く日もあった。ふくらんだツボミが開き始めるのは、だいたい六時から七時前後。開花の瞬間を初めて目にしたのは、八月二日の六時過ぎだった。ツボミがかなりふくらみ、ポツ、と開いた。チューリップのような姿に、は

つと息を呑んだ。

この神秘的なようすを、花友達や孫たちにも見て欲しいと思い、動画で撮ろうとしたが、そのタイミングはなかなかやってこなかった。

ある雨の朝のこと。花びらの一枚目は開き、すぐに全体が開きそうだった。雄しべの先が二本、雌しべの先が少し見えてきた。ツボミの中の赤みがあったオレンジ色の部分も広がってきたのに開かない。動画を一分撮り、二分撮りと切り替えること二十分。じっくり開こうとしているようで、この日はあきらめた。

ツボミが肉眼では分からないほどに動き、ほんのわずかずつ開いていく日もあり、六枚の花びらが同時に開く一瞬を撮るのはむずかしいと、何度かあきらめた。

ところが八月二十四日、撮影開始から一時間後の六時三十五分。開花の瞬間が撮れた。ドキドキしながら、一分ほど、開花直後の状況を撮った。前日、ねじれて残った花のあとでも撮ることができた。

ラインで、花友達の数人と孫たちに送信すると、次のような返信も届いた。ほとんどの人が、ヒオウギを見たのは初めてとのことだ。

「このお花は、ツボミがパカッと開くんですね。もつと気がつかないくらい、ゆっくり開いていくものかと思

ました」

「元気が貰える色合いですね」などとあり、孫からは「すごいですね。充希より」とあった。

ヒオウギに出会い、植物の奥の深さを知り、他の植物たちの習性ももっと知りたくなった。たとえば、アサガオの開花は日没から十時間後。コスモスは、暗い時間が十一時間以上続くことが、花芽分化に必要という。

植物は、それぞれの個性を生かし、生きようとしていることを、さらに教えてくれたヒオウギでもあった。

明るい将来について

津 辺 神 蘭 光

テレビやラジオや新聞、いわゆるマスコミからの情報を浅学非才の私が組み合わせて考えてみたが、どう見ても「明るい将来」があるとは思えません。少子化については、最近始まった訳ではなく、何十年も前から分っていたことだと思えます。少子化は、日本の全産業に亘って悪影響を及ぼすと、私は考えます。

一、農業人口が減少して、農産物の減少が起きて、食料難が起きるのではないかと思えます。「輸入品で間に合わせれば良い」という考え方もありますが、円安が続いたらどうなるのでしょうか？ 令和六年七月現在で、一ドル一六〇円台です。食品の値上げで困っている人達はかなり存在していると思われます。

二、治安が悪化します。警察官の数も少なくなると思えます。消防や自衛隊も同じでしょう。

三、品物を作る人、売る人、買う人も少なくなつて、商売が成り立たなくなるといふ人もいます。サービス業

もです。

少子化とは、将来の納税者が少なくなるという事です。税収を現状位に保とうとすると、国民の負担は大変重くなります。

では、どんな対策を取るべきか？ 国の仕組みをガラッと変える事になるかも知れませんが、私には分りません。こういった問題に対処する責任がある政治家のレベルは、大丈夫でしょうか？

ウラ金作りはとても熱心にやってきましたが、国の将来について真剣に考えている人はいるのでしょうか？ 国懷疑員では困ります。我が家の前を小学生が通りますが、彼等の将来が心配です。

野口雨情を巡る青春群像 …越鳥胡馬…

森 高柳 正彦

高校を卒業して何年かぶりに故郷・北茨城を訪れたことがある。あれからもう四〇年も経つ。地元の偉人とも言うべき詩人野口雨情（英吉）や、江戸時代の地政学者、長久保赤水（伊能忠敬より四二年前に日本地図を作成）、西丸帯刀（雨情の大叔父で坂下門外の変の首謀者）のこなど、詳しくは知らずに過ごしてきた。

今回、雨情の縁者や筆者のファミリーヒストリーを調べるために、二通の候文の書簡を携えて車を北に飛ばした。書簡とは、雨情と関係深い長久保紅堂から筆者の祖父・鶴寿宛てに書かれた手紙である。

長久保紅堂について触れておこう。紅堂（公敏）は雨情より二歳若く雨情の隣村、南中郷村小野矢指に育った。前述の赤水の外孫六代目で、雨情と同じく東京専門学校（現早稲田大）に入学したが、病気により退学。やがて紅堂は常総新聞の記者、そして大正六年「茨城民友社」社長となり雨情の面倒をみることになる。

ところで私事になり恐縮だが、先の東日本大震災で筆者の生家の土蔵が崩れ取り壊された。その土蔵の中に、紅堂からの手紙が二〇通も残されていた。紅堂二一歳か

ら鶴寿病没一〇日前までの四年間に出されたもので、自分の悩みや県政への不満等が書かれてあり、全ての手紙が「兄上様弟より」と結ぶ。紅堂の兄嫁が鶴寿の妹であったことにもよるのだろうが、実兄のように慕い敬っていたことが窺える。

鶴寿・紅堂二人の旧生家を訪ねてみると、今では何も残ってはいないが、一〇〇mとは離れてはいなかった。一〇歳年長の鶴寿は竹馬の友として遊んだりしたのでろう。その紅堂からの手紙にも、赤水や雨情について触れた部分があった。手紙のやり取り当時、鶴寿は勿来（なごき）の関近く（関本村山小屋尋常小学校校長であったが、在職中の三五歳で病没。当時まだ珍しい生命保険に加入していたために、通信大臣を退き日清生命保険会社社長となっていた前嶋密（ひそか）からの、自筆見舞書状も土蔵に残っていた。今一二〇年も前の書状を見ると、当時の紅堂や我が家の人間模様が、まざまざと目に浮かぶ。

ところで、雨情と紅堂のその後の関係だが、雨情と紅堂は大正七年に水戸の好文亭での木星会で会い、「茨城少年」の編集にあたる。紅堂はその後「茨城民友」の社長となり、雨情の面倒をみることは前述したが、これまた三九歳で病没。追悼号には二年後に衆議院議員になる、水戸中学校長菊池謙二郎の追悼文が載せられている。菊

池は子規や漱石とも交友があり、茨城県教育界の重鎮で千葉中学校長の経験もある。（現千葉高を訪れ沿革誌を見せていただいたが、確かに明治三〇年から一年三か月在任の記録があった）

二人の村長・野口量平（雨情の父）と赤津重左衛門（筆者の曾祖父）

達筆で書かれた一通の書状がある。大津町の旅館八勝園落成祝典式への招待状で、関本村村長重左衛門（鶴寿の養父）宛。近隣五か町村の長へ出したものである。

一方、雨情の父量平も北中郷村村長であったので同席していたに違いない。二人は同年生まれで偶然にも妻の名も同じく、てるであつた。二人は妻や子供の雨情や養子鶴寿のこと等、式典の合間にでも話していたのだろうか。そんなことを想像していると妙な気持ちになる。

量平は三年後、町長二期目在任中の五四歳で亡くなり、雨情は二一歳で東京専門学校を中退して故郷磯原へ帰郷することになる。

因縁深き人・雨情・紅堂・山形東

大正八年消印の雨情からの葉書が、現「としまや月浜の湯」旅館に残されている。雨情の生涯の友、渡邊年之助（としまや）へ出したもので、その中に「略・小生は山形東先生並びに長久保紅堂兄と共に水戸停車場へ見

送り候・略」とある。

山形東と聞いて思い出したことが二つある。一つは前述の鶴寿他界の折り、五日後に山形から来た手紙である。「鶴寿君とは竹馬の友で賀状交換が最後となり悔やまれる、帰省の際にはぜひ墓参に行きたい」との内容で、栃木師範学校用便箋書きで投函されている。

二つめは前述の紅堂葬送の際に、山形は在・水郷友総代として長文の弔辞を述べている。「紅堂は右であれ左であれ、官僚であろうが民間人であろうが正義人道の前には何者をも恐れずの新聞人であつた」と。山形東を仲立ちとして、雨情・紅堂・鶴寿が同郷の仲間として関連づけられると思うと不思議な気持ちになる。

雨情を見守る二人の先達

今回、故郷を訪ねた際にお会いした筆者にとって忘れられないお二人がいる。

一人は雨情の生涯の友、年之助ご子息の渡邊力氏。平成三〇年当時九六歳である。雨情生家前の（としまや月浜の湯）に宿をとった折り偶然にもお会いでき、貴重なお話を一時間あまり拝聴。雨情からの手紙は勿論、雨情夫妻や子息・存彌氏（のぶ）らとお会したときの話、古くは又七・西丸帯刀のこと、吉田松陰がここで飲んだという茶碗のこと等々、時の経つのも忘れる程であつた。

もう一人は、雨情や赤水に関する多くの著書を持つ長久保片雲（源蔵）氏である。

筆者が三〇歳の頃古書店で偶然にも片雲氏の著書を一冊求めていたことや、伯父と同じ学校に勤務されていたこと等、初対面ではあったが話が弾んだ。以後一〇数回お訪ねし懐かしい貴重なお話をお伺いしたが、残念ながら令和六年六月九三歳でご逝去なされた。

渡邊氏からは「童謡詩人 野口雨情乃あしあと」、片雲氏からは分厚い赤水関係著書五冊程いただく。帰途、二三歳の吉田松陰も訪れた長久保赤水翁墓碑や、その真前にある我が家の先祖の眠る赤浜北原墓地に立ち寄った後、ハンドルを山武市へ向けた。

参考資料

「野口雨情の生涯」長久保片雲 暁印書館

「茨城民友 第82号」 茨城県歴史館

「鎌原観音堂」へ

成東 渡辺美佐夫

① 信州へ

今回は、信州上州の旅の思い出を振り返ってみたいと思う。いつもの仲間と千曲川に沿って湯田中へ行き、バスで北へ向った。しばらくして高原の中に降りた。最寄駅もないような所であった。

② 野沢温泉の近くへ

やがて野沢温泉に到着、有名な金具屋の脇を通った。金具屋は昔は金物を扱っていたが、途中から温泉旅館になったと聞いている。森の中の三階建の風情ある建物であった。ここにも泊まりたいと見上げながら前へ進んだ。しばらく歩くと右側に食堂があったので、立ち寄って昼食にした。一人一本のビールがついた。

③ 宿へ

みんないい気持ちになって宿へ向った。道の右側には幅二mぐらいの小川が流れていた。手を入れると冷たくて気持ちよかった。横湯川を渡れば今日の宿、後楽館である。橋を渡らずに右の山の方へ行けば有名な猿の温泉である。宿に到着。入口には大きな犬が横になっていた。玄関には全国囲碁大会の碁盤があり、囲碁好きの青山君

は喜んでいた。部屋は三階にあり、しばらく休んでから早速露天風呂に向った。

④ 露天風呂そして夕食

風呂は十五坪ぐらいの大きさで、早くも猿たちが露天風呂の周囲に集って我々を見ていた。声を出したり水をかけたりすると噛みつかれたりひつかかれたりするので、皆黙って入浴した。夕食の時間となった。十畳の部屋にテーブル、十名が席についた。勿論ガラス窓であり外側には全て金網がつけられていた。既に十匹以上の猿が窓からのぞいていた。まるで人間動物園であった。猿たちは金網をがたがたと揺らしていた。

吉村君が袋入りのせんべいを渡すとひったくるようにして受け取り、屋根から屋根へと渡ってたちまち一番高い屋根のてっぺんでせんべいを食べはじめた。

夜の九時頃に再び露天風呂に行った。同じように猿たちは我々を見ていた。猿とみつめ合った。見上げると満天の星空で、今まで見たこともない天の川が広がっていた。

⑤ 猿の温泉へ

帰る途中で猿の温泉を訪ねた。五十畳位の温泉には五十四位の猿が並んで待っていた。入っている猿は姿勢正しく、目を閉じてゆっくりと湯を楽しんでいた。子猿を

抱いて入っている猿、回りを見まわしている猿、人間の入浴と同じであった。先を急ぐので早めに次へ向った。現在では、世界中で有名な温泉の猿として知られている。

⑥上州へ

尻焼温泉である。長笹川の川底から湧き出す温泉であり、温められた石に腰を下したら痔が治った、即ち尻を焼いたとのこと。平家の落人が発見したと伝えられている。昼間バスから見たら、何人もの男女が水着で入浴していた。どうしても素裸で入りたいということで、翌朝早く入ることと決定した。

宿は川のすぐ近くにあり、頼朝のうたで有名な花敷温泉にも近かった。静かな宿であった。夕食で飲んでいると宿のホステスさんが横に来ていろいろと話をしてくれた。我々は手相を見ると言って、彼女の手をにぎり「幸せになれるよ」とか「素敵な男性に会えるよ」と言っていると彼女も大いに喜んで仲間に入ってくれ、遅くまで宴はつづいた。翌朝まだ暗いうちに起きて川のへりを歩いた。一人が「ここが温かいよ」と言うので、全員が彼の周りに並んで尻焼を楽しんだ。

他には誰もいなくてゆつくりと入っていた。宿に帰り、朝食の時に浅間山方面へ行くと決定した。

⑦浅間山方面へ

いよいよ今回の旅の最終日となった。以前にも行ったことはあるが、再度訪ねることとした。なるべく早く出発した。軽井沢駅からバスで草津温泉行きに乗車して六十五分で鎌原観音堂で下車、直ちに鎌原観音堂を訪ねた。遂に到着である。一五段の石段をゆつくり登った。遂に来了。観音堂前では地元の役員さんが迎えてくれた。そして浅間山噴火の全てを話してくれた。

「天明三年（一七八三）大音響と共に浅間山は空高く岩石を噴出した。溶岩は山腹の土石流をまき込み大土石流となって山を下り、千数百軒の家を埋めつくし、千人以上の死者を出した。そして土石流は鬼押し出しという景觀となった。灰は一二km以上の高さにまで達した。ある村では白骨が残るだけで人影もなくなった。二百年以上も土石流は埋っていた。嬭恋村では農作物にも大変な被害を出した。今でも白骨や家屋が発見されて調査が行われている。土石流に気付いて逃げた人は、村の人口五七〇名中一〇〇名だけであった。当時石段は五〇段あって、下の方の三五段まで土石流に埋った。最下部には母を背負った息子のミイラが発見された。村の全体が飲み込まれたことから、日本のポンペイと呼ばれている。村人が同じ村に戻った例は珍しいのです」役員さんは詳しく説

明してくれた。特に母を背負った息子の話には、全員夢中で聞き入った。

我々は深く御礼を述べて、現在の一五段の石段を下りて帰路についた。今年もいい旅であり、素晴らしい仲間達であった。ありがとう。

思うこと願うこと

森 佐藤美保子

自民党の派閥の政治資金問題が、表に出て久しい。パーティー券の収入の一部を所属議員に渡して、「政治資金報告書に記載してなかった。これが還流」と言う。

議員の裏金事件として二三年暮頃より新聞でも表ざたとなり、誰がどうしたこうしたと連日ラチがあくはずがない。派閥の中身は？

何故やめられなかったか、先代より何十年続いてきた還流は、簡単にはいかない大問題となっている。

カネは議員にとつてちよつと何かの理由で動くにつけ、便利な友達だ。

生前、安倍さんが還流を止めることにしたのに、死後それが撤回された。

議員には、お金の入口が多く、報告の義務も記載の必要もないものが多いと。便利で使い勝手はよく引き離せない。党の頭は五億を超えて、熟成させていると。まさに出番を待つだけの便利な友達。

四月下旬のこと、訪米から帰国した首相の笑顔の写真があった。日米首脳会談で、合意項目が七十項目以上になったと。何でもOK、「ウン・ウン・ハイ」か。主と

して安全保障、米軍と自衛隊の強化・枠組の見直し、防衛装備品の共同開発、その他幅広い連携だとあった。何か変、不安な気持の置き去りはしてはならない大事な問題だ。

会談後のバイデンさんの言葉が引かかった。肝心要かなめの国民の気持が抜かれている。

「日米同盟は、かつてない程強固になった。あなたは、真の同志であり真の友人だ」と。

後に日本の官房長官の話にあった。

「自衛隊は、日本の独立した指揮にあるから、米国の統制下に入ることはない」と。信じたい。

首相の満面の笑みは、これから同盟国と歩む日本に不安の影にならないよう願うばかり。

或る日の新聞にビックリ！

「銃を取れ、命を懸けろ」いきなりの見出し、元駐米大使の言葉を引用したのだと。

米国と一緒にいることの覚悟、同盟とは守るべきを共に守るために戦うこと。もし、日本の近防地域に、北朝鮮、台湾海峡の平和と安定のため、米国のパートナーとして戦う意味だと。

とんでもない！米国と共に戦うだなんて絶対にない。軍隊じゃないし、ありえないこと。

何が変わろうと、戦争は二度としません。少なくとも
なった体験者の必死の願いです。

ロシアもウクライナも、ハマスもイスラエルも一日も
早い平和を願って止みません。

六月二十三日は沖縄慰霊の日。二十万人が犠牲となり、
一般住民の犠牲は九万四千人とあった。

岸田首相が挨拶に立った。

何よりも人の命だけは永遠に守らなければ。守り続け、
守り抜くこと、世界は平和に。

尊い無念の命、全ての命にお祈りします。

日本は戦争に二度と加担しません。

俳句と生きる

横芝光町(さんぶの森吟行俳句会)

鵜澤 正信

俳句をやるようになってからは自然界の動植物や季節、気候それに日常生活をしっかりと見つめることが格段に増えた。すると嘗て感じたことの無い面白さが沢山見えてくるようになった。

私が俳句を始める切っ掛けとなったのは、二〇一二年一〇月一日から始まったTBS系TVのプレバトという番組の、夏井いつきさんの俳句コーナーである。これを見る毎に「俳句は面白い」との思いに。とは言え、自ら詠むことは無いままに数年が経過した。

自作を始めた時には既に四年が経過していた。さしたる知識も無く漠然と詠む俳句を、今思えば全く見るに値しないものばかりであった。俳句はかくあるべきといった妙な先入観に囚われ、当時の作はなんとも在り来たりの類想句ばかりであったと感ずる。

そうこうする中、知人のお誘いである句会の仲間に加えていただいたことから、俳句との関わりが一気に深まることになった。歳時記の他に幾つか上達本を購入して学ぶことで、多少の力が付き面白い句も少しは詠めるようになったと感じたことから、NHK俳句への投句を始

めることとなる。ところが、始めては見たものの二年以上もの間、佳作すら入ること無くただ月日が過ぎていった。そうしてようやく二〇一九年二月号テキスト宇田喜代子・選、兼題「短日」で、初めて「佳作」掲載されているのを発見。この時の嬉しさは今でもはっきりと記憶している。次に活字になったのが、夏井いつきさんのNHK俳句二〇一九年九月号の俳句道場「令和を詠む」のコーナーへ投句した作品が、なんと特選の一席に。それをテキストで眼にしたときには、飛び上がらんばかりの喜びであったことを鮮明に覚えている。

ところが以降、通常の投句でも七か月間掲載が途切れ、次にやっと佳作掲載されたのは翌年の一〇月号であったが、それを機に以降は比較的コンスタントに佳作掲載されるようになってきている。とはいえ、どうしても苦手な兼題の時には得心の句が詠めず掲載が途切れることも屢々。^{しばしば}苦手な兼題とは、自分が生きて来た過去の生活体験や生活土壌、背景に縁が無い場合が殆どで、そんな場合は幾ら頭を捻っても、手垢のついた在り来たりな種しか見つけることはできぬまま。これも夏井さんがよく仰るところの「体験したタネを詠むのは強い」の逆のケースで、如何ともし難いと諦めることも。

そんな中、二〇二一年五月にはNHK俳句権未知子・

選、兼題「レース」で初入選、同じ年の一二月に阪西敦子・選、兼題「マスク」で二度目、次いで二〇二二年一〇月に井上弘美・選で三度目、二〇二三年一〇月に高野ツトム・選、兼題「虫」で四度目の入選を果たし現在に至るが、更に五回目、六回目の入選を目指して研鑽を重ねていくつもりである。

○真つ白な鷺草真つ新な令和

○猫に膝暫し預けてレース編む

○凹凸の激しマスクの怒りかな

○流星を溜むる伝説山の沼

○虫の音や厩舎に睡る競走馬

○凍つる夜やうしの産声湯気もうもう

○二階建てバスにどよめき雪の壁

（NHK俳句に投句をするようになり、直近約五年間で五十句程の作品が入選・佳作。その中の入選と佳作の一部）

電動アシストで自転車散歩

五反田 萩原 正道

自転車のホスト役、電動アシスト。こんなに便利なものがあつたのかと驚かされる。自転車のペダルこぎを助けて（アシスト）くれる自転車は、私達が学校へ乗って行っていた頃にはとても考えられなかったことで、便利になった。

平坦な道、上り坂などアシスト付自転車だと実に快適に走る。これは便利だ。自転車に乗るのが楽しくなり、少しぐらいの遠出もスイスイである。運動にもなるし、お年寄りの脳の活性化にも役立ちそうだ。

二台の自転車を快適に使わせて、一台はもう十二年も前に買ったお古。でも、ガタガタしたりキーキーいたりすることもなくまだスイスイ乗れる。

もう一台は、ネットで見つけた一台。娘に申し込んでもらい、M社のアシスト付スポーツタイプの一台で、スピードもアップ、快適に乗れる。もちろんヘルメットも着用して、両隣町などへはスイスイ。買い物に行ったり遊びに行ったりと、快適に乗りこなしている。朝起きて、よし！今日も軽快車で乗り回るぞ！ダイエット目標達成まで！

昨年四月からは、自転車に乗るにも「ヘルメット」着用が努力義務となった。自転車店は品薄状態。「あんな重そうなヘルメット、選手じゃあるまいし、カッコ悪い」等々いろいろな疑問をかかえ、ある日スーパーへ行ってみることにした。

店員は、特に熱心に勧めることもなし。「これは高い、あれはどうか、デザインは？ 大きさは？」など検討して、手頃な一つが見つかった。

早速つけて家の周辺を一回りしてみた。かぶってみた顔が横幅に大きく感じ最初はなじめなかったが、なるほど、かぶって乗ってみると思いの外、頭がスースー涼しくて気持ちいい。すっかり気に入ってしまった。途中一台の自転車とすれちがった。「あつ、ヘルメット」その人は、「ドキッ」としたような感じだった。頭を見ると「ノーヘル」だった。

自転車でのきまりはいろいろあるようだが、ノーヘル時代はあまり気にしていなかった。ただ、歩道のある所はなるべく歩道を走るようにしていた。注意に注意しているが、高齢者が自転車に乗って走るマナー・約束について、もう一度目を通してみようと思っている。

事故のない自転車散歩、ムリせず、アセらず、これからも楽しく乗っていたい。ヘルメットに抱いていた先入

観は、これでなくなった。

- 一、ヘルメットは重くない。
- 一、ヘルメットは熱くなく涼しい。
- 一、ヘルメットはかぶってみて、カッコ悪くない。
- 一、ヘルメットは自分にあったデザインも意外とあるものだ。

まだまだ励めと

市原市(元富口) 村上 久江

夫が亡くなったのは平成三十一年三月六日。あと二か月程の日々を生き抜けば令和という新時代の幕開けに立ち会えたのだが。

すでに、あの世に咲いているという綺麗な花々の幻影を見ているようだった。

「さあー見てごらん、こちらにはいろいろな花が咲いて夢の園ですよ。あなたのお父さんもお母さんも楽しく暮らしています。もうそんなに苦しまないでこっちへお出で」とでも手招きされているのか、病室の上のほうを細いうっすらとした眼でうつとりと眺めていた。

死は手の届くところまで来ていた。個室のベッドの上、身体のだこかに付けられたチューブの先の、夫の生の証を示す機器の赤いジグザグが、いまにもぷつりと動きのない一直線にたどり着こうとしているようだった。

医師も看護師も巡回のたびに見守っていた。面会のためにわたしもその赤いジグザグに眼を留め、看護師が「今夜あたりその刻が来そうです」と言う声を耳にした。生涯という日々をわたしと連れ添ってくれた男よ、夫という人よ、わたしはその大切な掛けがえのない人に、

別れの言葉を囁かなければならなかった。それがわたしという一人の女の真摯な責務だと思った。在り様だと思った。この終い間近のきれぎれな男の意識に、いやわからなくてもいい、囁いておかなければ一生悔いが残ると思った。

「一緒に暮らしてくれてありがとう。幸せだったよ、嬉しかったよ」とわたしは素直に正直に男の頬に顔を近づけて囁いた。「俺も」と男も小さな声ではつきりと答えてくれた。

あれから五年余の年月が流れる。夫を亡くした哀しみが癒えないその年の晩秋、わが家も未曾有の台風におそわれた。戸袋を飛ばされ、駐車場、垣根、倉庫などを壊され大変な被害をこうむった。

保険の手続きや業者への連絡、壊されたものの片付けなど何とか自分ひとりで遣りこなしてきた。

そして翌年明けて早々にコロナ禍の世となった。長い四年間の閉塞感を経験した。生きていくということは想定外の連続でもあるのだろう。

世界はいま絶えることのない紛争のなかだ。国と国との対立。根深いものをかかえて危ういものの影がさらに濃くなっていく。

人生の終盤戦に向かっていくわたし。わたしはいま、

自分自身を静かに見つめる。そして叱咤激励する。まだ
まだ励めと。

方向音痴

小松 齊藤 利治

貴重な紙面に徒話を綴り恐縮なのだが、一人の凡夫の負の資質を抱え込みながらも何とか人並みに生きて行くとする懸命さに免じてお許しいただきたい。

私は論理的思考がからきし駄目で、従って「数学」と聞いただけでジンマシンが出来るような男で、フーセンガムが膨らまず、紐の花結びが結べず、鉄棒の蹴上がりが出来ず、メカに弱く、そのうえ大変な方向音痴である。何なりたくてそうなった訳ではないのだが、気が付くところになっていた。

こういう私である為に、数学の得意な人等を無条件に尊敬してしまい、フーセンガムが魔法のように生まれるその口許をうっとり眺め、花結びをなす長く繊細な指に感動し、蹴上がりで鉄棒の上に昂然と上体を据える姿に敬意を惜しまぬところとなり、農具を修理する技術士の手許をゴッドハンドなどと眩きながら凝視するのである。これらの事は然し出来ずともさほどに困る訳では無いが、こと方向音痴は実に厄介な事になる。

例えば、成東駅から千葉に向けて総武本線の上りに乗り込み、本の活字を追っていた眼をひよいと上げて窓外

の景色を眺めたりすると、何時の間にか列車は逆走していて銚子へ向かって走っているのである。無論、頭の中ではそんな馬鹿な事はないと承知しているのだが、現実の感覚としてはどうしようもなく銚子を目指しているのである。そしてそれは千葉に向けて順走したのと同じくらしいの確かさで、今や銚子へ向かって順走しているのである。そこで方向音痴の私は、こうして異界に紛れ込み魔境に身を委ねながら、若し本当に銚子に向かっていると仮定して、今、自分の座した席とは別の、去り行く千葉へ正対したもう一つの幻の席を探し始めたりするのである。そしてそれを左側の前部壁から二つ程手前辺りに確認して、この方を向いて座る。これまた幻の私自身へ少し恨めし気な視線を据えたりするのである。

一般に男よりも女の方が方向音痴であると聞く。「地図を読めない女」と大々的に刻されたタイトルの本が記憶に残る。車に乗せてもらっている「女史」が何かの都合で左右の別を確認する要が生じた折、その「女史」は茶碗と箸を持つ仕草に及んだという話が載っていた。

東野圭吾の小説の一つに、男勝りの美人教師が登場する。早口で勢いが良く滑らかな大阪弁がそのまま人間の形をなしたような魅力的な女性なのだが、気の毒にも彼女は方向音痴なのである。それで目的の駅に降り立つも、

反対側の出口に行つてしまい、同道した二人の元教え子を巻き込んで堂々巡りをしてしまうのである。又、以前TVに自他共に認める方向音痴の女優たちが紹介されたが、私の記憶の中には「火曜サスペンス劇場」でお馴染みの片平なぎさが鮮明に残る。ここでも有能で美しい女性のはかえつて親しみと魅力とを倍増させるのである。彼女の視聴者を魅了する個性的な口許が一段と生彩を放つ如しである。（無能の私などにはただ困るだけの方向失調なのだが）

然し女は「方向音痴」とはあくまでも一般的な傾向であり、それは男は女より体が大きい、或いは女は男より体が小さいというのと同じで、勿論例外はある訳である。競馬の騎手の如く小柄な男たちもいれば、バレエの選手のように大柄な女たちもいる。

何年か前に紙上に紹介されたのだが、山武警察署の署員で交通課に勤務する婦警さんがいたが、彼女は本当は「白バイ」に乗りたかつたのだった。然し不運にも体格審査に通らず無念の涙を飲んでた。だが彼女の二輪車への夢は断ち難く、のみならず日増しにそれは膨らむのだった。「白バイ」に乗りた、然し体が小さくて乗せて貰えない。そんなジレンマの日々の中で、それではその後彼女がどうしたかといえば、ヘリコプターのパイロ

ットになったのだった。ヘリの操縦士の体格審査は白バイのそれのように厳格ではなかったようである。

女でありながらこのような強者がいて高度は方位感覚、空間認知力に恵まれた者もいる。そして更には宇宙飛行士になる女まで現れるのだ

余談ながら今現在は廃止されて久しいが、以前ヘリコプターによる空中散布が、七月の頃の稲田に行われたものだが、その消毒作業の補助要員の一人になった私は、ヘリの助手席に乗せて貰った事があった。それでパイロットが私の膝の上に地図を拡げて、地元人の一人の私に当該散布区域の共認を形式的に求めた訳だが、（パイロットはそんな事は最初から眼中に無い）そこで無類の「方向音痴」の私が少しでも下界と地図との間を私の中で整合させようと地図の上下をひっくり返したのだが、パイロットの彼は無言で恰も私^{あたか}がそうするよりも早く元に戻すのであった。私は大いに慚然として黙したが、それでもどうしてもひっくり返したいので再びそうすると、またもや彼は瞬時に元に戻すのであった。結局我々の間にそういうやりとりが三度繰り返されたのだった。一体パイロットという際立つて優れた方位感覚の持ち主などには、私のような者の混迷混乱の虚しさなど想像も出来ぬものらしい。

生まれて初めてヘリコプターに乗った経験はそれでも二つの事実を私に教えてくれた。一つはTVの画面に観る旋回の折のように、自分は不動で外界が一方的に傾くものと信じていたが、（全くおめでたい話だが）これが誤りで、自分の方がちゃんと傾く事を知ったのである。

そしてもう一つは、生地を空中から俯瞰すると、見馴れた土地が全く別の表情を見せるという事である。下界のそのあまりにも素直な己れ自身の現し方に、こちらがたじろいでしまうのである。そしてそれは何より行政区分といった我々の意識の中にのみ存する境界線が、漂泊されるように薄れ、頼り無く雲散霧消してしまっているのである。私は我が村と隣村とが一つに溶け合っているのを確然と見たのである。雑魚が自らを比するに、大鯨を以てするの謗りを恐れずにいえば、あの宇宙飛行士が外から地球を見た時も、青い光の中に消滅している国境ではなかったかと推断する次第である。

それにしても我が身に生ずるこの「方向音痴」という負の資質、異界魔境への自動迷入とは、一体何の謂れあつての事かと怪しまずにはおれぬ。道理に外れ、理屈に背き、日常の安心と平穏とを揺るがすのである。そして又、今や老人となつて私は身近に友人知己の計報に接するに及び、それが年を追いて数を増す昨今でもある故、

冥土冥界が他人事では無く、身近に感ぜられる為か、こうして常軌を逸した事等にも顔を背けてばかりはおられぬ訳で、半ば打たれる如く氣に掛かり出した自分がいるのである。

何故なら「あの世」とは正に異界の大御所、決定版であるのだから。そして人間にとつて「死」とは変様ではあるが、決して間違いと断ずる事は出来ないものであるから。浦島太郎の話もこうした私の中の一つの異界である。

太郎は亀の背に乗せて貰い竜宮城へ行く。そこで乙姫の厚い歓待を受ける。御馳走と弦歌と舞い踊りと勿論美酒にも酔つたに相違無い。それが彼にとつてどれ程居心地の良いものであつたかは、月日の経つのも忘れてとある通りである。然し太郎が再び亀の背に乗り浜辺に戻つて来ると状況は一変している。故郷の村はそのままでも、知った顔が一つも無いのに気付くのである。そして「乙姫」からの土産の箱を開けると彼は忽ち白髯の老爺に変じてしまう。こうして浦島太郎は驚きと混沌と悲哀の中で異界の真只中に立つのである。

そして又、宏大な宇宙が初めの頃、豆粒よりも小さかつたとは人知が物理学を以て巷間に提する成果の一つである。本当の事なのだろうが信じ難い。嘘であるとした方がずっと本当らしい。

宇宙の成長を受け容れる容れ物等、考える必要は全くないのか。さすれば宇宙その物自体、（一念無法成長勝手気儘坊主）とでも称すべきで、私の方向音痴など可愛いものである。

私は方向音痴である。嘗て入院した病室が二階である
と十年もの間信じていたが、それが三階であるとある日、
気がついた。私のそれは東北南北の水平面では飽き足らず、
垂直方向にも及んでいたのである。

帰省中

名古屋市(元成東) ボンベルタ田中

私は、社会人二年目の若造だ。

地元である山武市をこよなく愛しており、消防団に入り、地区会の役員になり、地域に貢献していくという将来像があった。なにより、山武市に住み続けたいという気持ちが強かった。そんな志があったので、就活時に山武市役所を受けたが、まさかの筆記試験で落ちるという大波乱が起き、「公務員試験無敗だった私が落ちるなんて、もしかしたら、実力とはまた別の力が必要だったのではなからうか」という気持ちが湧いた。

とりあえず、私の代わりに山武市役所に入庁した方は、山武市に様々な縁なり人脈があるのだと思うから、私の分まで存分に市民のために働いてくれることを切に願っている。

冒頭に書いたとおり、私は、山武市が好きであるから、毎月一日に山武市のホームページに公開される「広報さんむ」(最近はネタ切れ気味)は、欠かさずチェックしている。

ネタは、いつでも提供するので、広報担当者の方は、私にぜひ一度相談してほしい。

前置きが長くなったが、今回は、私の住んでいる名古屋の良いところについて、頭をフル回転させ、書き留めようと思う。書き振りがから察してもらった通り、名古屋での生活から早く別れを告げたい。ただ、異動までの数年間は、この土地で働かなければならない。

そんなことを考えていたら、小学校の頃、教師が常套句としていた、「苦手な人だとしても、きつと良いところがあるので見つけてみましょう」という綺麗事を思い出した。思えば私は、この言葉を何人もの教師から言われてきた。もしかしたら、子どもの叱り方的なマニュアル本にでも載っているのかもしれない。今回は、せっかくなので教師の言いなりになろうと思う。

まず一つ目の名古屋の良いところは、京都と長野から近いことだ。もはや、これだけが私生活の救いとなっている。長野の木曽エリアに関して言えば、月一の頻度で通っている。

特にお気に入りには、「木祖村」だ。つつい「木曽村」としてしまいうだが、あえて一捻りしてくるところもポイントが高い。さらにこの村は、どんなカラクリで成り立っているのかを考えてしまうくらい目立ったものがないのも良い。あるものと言ったら、鄙びた宿場町と山と川だけだ。

私の勝手な感覚だと、川での事故も多い近年、簡単に川の中まで入れる場所が減ってきたように感じる。そんな中、木祖村では、一級河川である木曽川で水遊びを楽しむ。しかも人がいないので、独占できる。

水遊びと書いたが、やることと言ったらサンダルで川の中に入り、水の気持ちよさを感じることと、山と川を見つめながら物思いに耽ることくらいだ。

物思いに耽りながら、真つ先に「仕事について」考えられたら、社会人って感じがして評価されるかもしれないが、私はそんなくだらない事を休日になで考えたくない。いけ好かないアイツらやコイツらの顔が浮かんて腹が立つだけだ。この清々しい風景が汚れてしまう。

私は、お気に入りの風景を見ながら、「今日も鉢盛山が綺麗だな。川も清らかで、ここにずっといたいし、この風景がいつまでもあり続けてほしい」的な訳のわからぬことを昭和歌謡を聴きながら考えている。側から見ると、「この人は、一体何の時間を過ごしているのか」と変人扱いだろう。そう言われないために、時々「今週の買い出しは、どこのスーパーにしようか」という一週間の食生活を左右する深刻なことも考えていることを付け加えておこう。

京都の魅力については言うまでもなく、歩いていれば

観光地にあたるからそれなりに充実できることだ。名古屋から京都までは在来線に乗り三時間で行くことができる。千葉に住んでいたら、泊まりがけで行くしかなかった場所に、日帰りで行くことができるのは、お財布にも優しいし、気分が良い。

足繁く通っている場所としては、平安神宮近くの京都府立図書館がある。魅力は入館する前から既に始まっている。建物自体が文化財であり、なんなら外装を見ただけで一つの観光地を見終わった感覚になる。

館内は京都に関する書籍のコーナーがあり、心が弾む。来館した記念ということで毎回、何かしらの京都の知識を身につけるようにしている。ちなみに、初めて出向いた時は、「雲母坂」を覚えた。読み方が興味深かったので紹介する。「雲母」とは、花崗岩に含まれる結晶の一種で、キラキラしているように見えたので、「きらざか」としたらしい。「きらら」という響きは、私の思い込みによれば、現代チックな言葉だったので、古くから使われていたことに大変驚いた。

仮に、「きらら」という名前の子がいたとして、響きだけでキラキラネームと決めつけている人がいるのなら、よしたほうが良い。解説したとおり、古くからある言葉なので、しわしわネームにもなりうるのだ。

二つ目は、大都市と言われるほど発展している感じはないのに、日本の三大都市を名乗られていることだ。何で名乗れるようになったのかは、気になるところだ。名古屋出身の権力がある政治家が言い始めたのだろうか。愛知県のドンであるTOYOTAの偉い人が仕組んだのか。妄想は膨らむばかりだが、面倒であるから調べるのは遠慮しよう。

ところで、大都市というのが私の生活にどう良い影響を与えているかといえば、大事な給料に関わってくる。というのは、国家公務員には、地域手当なるものがある。これは、民間企業の賃金が高い、物価が高い地域で働いていると割り増しで貰えるものであり、大都市で働いていると多くもらえる。実際のところは、スーパーに行き、山武市と比べ商品の値段が高いと感じるのは果物コーナーくらいなので、余計めにもらえてラッキーだ。

それにしても、梨の価格の違いには驚いた。スーパーには、暑い時期になると店先に梨が置かれる。やはり、小さい頃から梨がそばにいてくれた元千葉県民としては、ついつい手を出してしまいたいようになるが、値段が高すぎるのでいつも諦めてしまう。梨が店頭に出ているうちに心を決め、毎週買う青森県産のリンゴジュースを節約し、食卓に美しい梨を並べられるようにしたい。

三つ目は、うまい食べ物がたくさんあること？イヤ、そんなことはない。名古屋に住んでいるというだけで、「味噌煮込みうどん・味噌カツ・ひつまぶしとか美味しいものがたくさんあっていいね」と月並みの言葉をかけられがちだ。これらの共通点は、茶色で味が濃い感じがして華やかさに欠けることだ。

では、お菓子類についてはどうだろう。有名なものと言ったら、えびせんべい・みそまんじゅうとやはり茶色系統で、濃そうな味付けだ。ここで、名古屋の最新事情に詳しい人から、「いやいや、ぴよりんがあるじゃないか」とツツコミが入るかもしれない。「ぴよりん」の説明は少し長くなるので割愛する。

名古屋駅の店舗は、いつも大行列だ。並ぶことが嫌いな私は、もちろん食えることができていない。そのため、「ぴよりん」が美味しいかどうかは判断できていないので、今回はノーカウントとする。ちなみに、お盆で帰省した時も、人混みの熱により煮えたぎる夏場の駅構内であつたが、女の子らは手持ちの扇風機で暑さをしのぎながら「ぴよりん」にありつこうと必死であつた。苦しい思いをして、ようやく食えることができた「ぴよりん」は格別の美味しさだったに違いない。

さて、文字数の都合もあり、残念ながら名古屋自体の

良いところを私の力では発見できなかった。それと、名古屋の魅力を考える前に、自分を発展させることが先決だろう。